

第一五回東亜同文書院記念基金会授賞式

推薦人 愛知大学同窓会 中 島 寛 司

平成二〇年度の記念賞は、「われ巢鴨に出頭せず 近衛文麿と天皇」（日本経済新聞社刊）を著したノンフィクション作家の工藤美代子氏に授与されました。授賞式は、平成二十一年一月三〇日（金）、霞山会館三彩の間に於いて近衛通隆霞山会名誉会長ご臨席のもとに執り行われました。

工藤先生は、この著作の中で、近衛文麿公について、数多く残された各位の日記類や関係資料にもとづき、また、その後の内外の秘密文書公開による新しい資料を精査されて、優柔不断のイメージや多くの誤解や謎を解きました。文麿公の再評価をされ、顕彰されたことが受賞理由になりました。

私は、前著作を参考に近衛文麿公の五五年の生涯を検証するために、便宜上四期に分けてみました。

第一期は、誕生から大学を卒業され、内務省地方局に入り（見習的に）、組閣前まで。一九一七年（大正六年）には、「英米本位の平和主義を排す」と言う論文を公にされ、これは一九一九年（大正八年）のバリ講和会議に牧野伸顕全権が人種差別的撤廃と各国民に対する公正を強く提案したことと通じる考えだと思います。この時に、文麿公は準随員として同行しています。

第二期は、第一次と第三次までの組閣期間として、一九三七年（昭和十二年）から一九四二年（昭和十七年）まで。一次と二次の間には、平沼、阿部、米内内閣が組閣されていますが、この間には、盧溝橋から始まった日中戦争の不拡大の努力、日米開戦回避への努力などは、ゾルゲなどのコミンテルンの陰謀、統帥権、その干犯などの中にあつて、どれだけ可能であつたことでしょうか。

第三期は、首相を退いた以後から終戦まで。早期終戦の工作を憲兵に監視されながらも試みております。昭和二〇年二月一四日には、決死の上奏文が出ております。天皇に情報が届しない中での上奏でした。

第四期は、終戦から昭和二〇年二月一六日に自らのお命を絶たれるまで。文麿公は、終戦直後東久邇宮内閣の國務相として、マッカーサーに早々に会い、日本や世界情勢について情報交換し、憲法の草案作りなどを始めますが、突然二月六日に戦犯逮捕令が出ました。この背景にも、ハーバート・ノーマンや都留重人氏やコミンテルンの陰謀が想定されております。

これらの各期間を通して、あの憲法下にあつて文麿公の思考・言動は「弱い文麿公」の評価ではなく「強い文麿公」であつたと結論付けられました。「近衛文麿公と言う日本人がいたと言うことを、日本人として誇りに思う」と王藤先生をして言わしめました。

王藤先生は、前著の次に『近衛家の昭和 七つの謎』を四月頃PHP研究所から出版予定と伺つております。文麿公のほかに文隆氏の中国やシベリア抑留の数々の謎も解いて頂けるものと思います。

東亜同文書院記念基金会について

平成三年に、滬友会（東亜同文書院大学の同窓会の呼称）の有志によって設立、この趣旨に賛同して霞山会と愛知大学の多額の出捐を得て今日に至っています。愛知大学所蔵の同文書院の学績資料に加え当基金会の趣旨を発展させて「東亜同文書院大学記念センター」が豊橋・大学記念館に、平成五年設立されました。これは初代同センター長・今泉潤太郎名誉教授（当時は教授）の提案によるものでした。

授賞式ご出席の書院生の皆様には、書院同窓をご縁に、文磨公の黙して語らなかつた心情に思いを馳せ、多くの邂逅を重ね、ご満足な人生に、縷々想いを巡らせていることと思います。

受賞の挨拶

工藤美代子でございます。今、大変素晴らしい論評をいただきまして身に余る光栄に思っております。

本日は名誉と伝統ある賞を計らずも頂戴いたしましたして、心から御礼を申し上げます。先年私は『われ果鴨に出頭せず』という単行本を上梓いたしました。それがこのようなお褒めにあずかり、

第15回東亜同文書院記念基金会授賞式



思いもよらない嬉しさがこみ上げてまいります。それと申しますのも実はこの本を書くきっかけというのは、近衛文麿公に対する言われなき誹謗や中傷が戦後何年経っても終わるばかりか、時には近年も総合雑誌や単行本でひどい扱いを受けていたのを見るにつけ、一度きっぱりとここは言っておかなければいけない、と考えたからでした。そのためにロンドンのナショナルアーカイブ公文書館にも足を運び新資料を発掘して書き上げたものです。近衛公のお父上の時代から中国と日本の文化交流や留学生の制度の確立など戦前、戦中を通じた東亜同文書院の業績はもっと多くの皆さんに知られるべきことだと感じてまいりました。

そういう中で実は偶然なのですが、私はこの四月に『近衛家の昭和』と題して前作の続編というべき本を出版することになっております。この本の中では文麿公とそこそこの長男の文隆さんの東亜同文書院でのことと、その後のソ連強制抑留と極めて不審な文隆さんの死の謎についても論文に書きました。アジアと日本の歴史が正しい目で見直され、良いことは良い、反省すべきことは反省するという普通の国の付き合いが今こそなされるべきだと私は祈ってやみません。

そういう折に東亜同文書院記念基金賞を頂戴し、ますます勇気が沸いてくる気がいたします。私の仕事の一步が、京都大徳寺に眠っておられる文麿公や文隆さんの名譽のために少しでも役立てればこんなに嬉しいことはございません。心より賞の運営に関わられた先生方、そして関係者の皆様方に御礼を申し上げますと思います。本日は誠にありがとうございました。